

とり戻す

暮らせる郡山

社民党郡山総支部放射能対策委員会

委員長 ひだ 義昭

2013年3月号

郡山市長者1-8-8 syamin@lili.ocn.ne.jp

922-8990 FAX922-9191

どうしたら内部被ばくを避けられるか！

- 「原発事故を忘れない、脱原発3・11集会」150名参加-

原発事故から3年目を迎えた3月11日、「原発事故を忘れない、一日も早い脱原発を！元の暮らしをとり戻す3・11集会」が開かれ、各団体、労働組合、市民の皆さん152名が参加。集会の冒頭、参加者全員で震災、原発事故の犠牲者に黙とうをささげました。地域や労働組合から活動報告を受け、今後継続して取り組む課題として計測活動、郡山市内10万戸の面的除染、仮置き場の早急な設置、賠償、全原発の廃炉を東電、国、福島県、郡山市に対して求めていくことを参加者全員で確認しました。

「内部被ばくから健康を守る」を学び合う

集会では、『内部被ばくから健康を守る』『内部被ばくの危険とは』『どうしたら内部被ばくを避けられるのか』と題して河田昌東さん(NPO法人チェルノブイリ救援・中部)から講演を受けました。



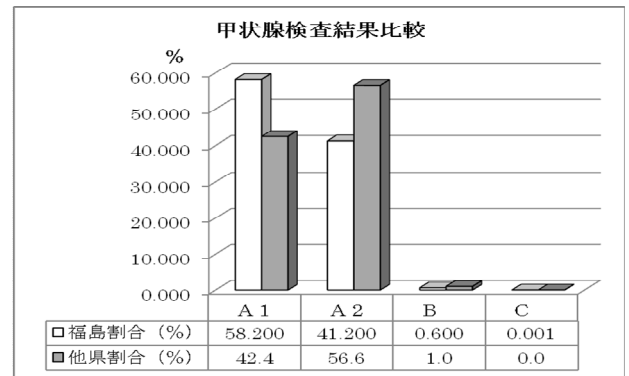
原発事故を忘れない 反原発 3・11集会

真剣に耳を傾け、熱心にメモを取る参加者が数多くみられ、講演後も「国の基準100Bqで安全か?」「海の魚は大丈夫か?」「水道の水は?」「洗濯物を外に干しても大丈夫?」等々の、毎日の生活からの質問が数多く出されるなど、参加者全体で多くのことを学び合うことができました。

甲状腺検査...「市としては考えていない」

福島県が実施した子どもの甲状腺検査で、平成23、24年度に13万3089人が検査を受け、3人に甲状腺がんが、同がんの疑いが7人見つかりました。また全体の41.2%がA2以上と判定され、原発事故

による影響では、と不安が広がっています。環境省は、福島県と比較する為として、全国3箇所(弘前市、甲府市、長崎市)で、4,365人(3~18歳)を対象に甲状腺検査を実施。その結果、57.6%に「のう胞やしこり」が見つかったと公表しました。



この結果に国も県も「同じような傾向」「子どもには、のう胞やしこりはあることが示された」とコメントしています。しかし、これで不安は解消されません。3月市議会で飛田義昭市議が「郡山市として独自に医療機関と連携し、再検査を実施すべきだ」と求めましたが、「検査は県立医大で実施している。郡山市としては考えていない」と答弁。市民の不安に応えるため、定期的な健診を郡山市市内の医療機関で無料受診できるよう、今後も福島県、郡山市に求めましょう。

汚染された物を食べ続け、増大した健康被害

「年5ミリ」で全村避難指示出したウクライナ

河田昌東氏 講演より

チェルノブイリ事故から22年が経ち8～9割が汚染された食べ物による内部被ばくだった。ウクライナのジトミール州の村ナロニジは、年間の外部被ばく線量が5ミリシーベルト以上ということで全員退避の指示を受けた。村の人口3万人のうち2万人が避難したが、途中でソビエトが崩壊し、村は貧困も重なり1万人が村に残った。

事故から15年、村に残った人の体内放射能を計ったら、8割以上の方が7,400～18,500ベクレル(事務局による計算 体重50キロの人の場合は ÷50 で1キロ148～370ベクレル シーベルトにすると全体内0.096～0.24ミリシーベルト)あった。汚染された食べ物を食べ続けた結果、事故後10年後からガンや内分泌疾患、血液疾患などが増加した。大人の6割が何らかの病気を患い、17歳以下の子ども達は、心臓や血管系の疾患など

様々な病気をかかえ、学校や遊園地を訪れると「健康な子どもがひとりもない」ということもたびたびある。甲状腺ガンの発症率は14歳以下で圧倒的に多い。

今日本では、年間20ミリシーベルトで居住を認めるという、ウクライナでは、185,000～555,000ベクレル/m²、年間の外部被ばく1ミリ以上で汚染されていない地域への移住の権利を認めた。日本ではこうしたことをやってこなかった。4倍の20ミリでも大丈夫ということだ。今、見直しをしようとしているが、外部被ばくを年20ミリから10ミリにしても、若いお母さん方は帰らないでしょう。例えば、除染して年3ミリを1ミリにする、年2ミリを1ミリにするというなら帰れるのではないのでしょうか。

土壌汚染と内部被ばく

福島では、事故後は地表1～2ミリに放射性物質が付着していたが、今は地表下に2～5センチに9割あるのではないか。チェルノブイリでは事故後2

5年が過ぎ、地表から20センチ下っている。作物の根から放射能が吸収される。

郡山市の土壌汚染 - 文科省の土壌採取から

セシウム134、137の合計 118箇所 (2011年9月2日発表)

40,000ベクレル/m ² 以上	103箇所	87%
内 550,000ベクレル/m ²	4 "	
" 300,000～550,000/m ²	22 "	19%
40,000ベクレル/m ² 未満	15 "	13%

郡山市による農地1,056箇所の土壌分析 65,000～325,000ベクレル/m²が9割超えた (原子力保安院基準でベクレル/kgから/m²に換算) 40,000/m²以上は放射線管理区域レベル

内部被ばくの危険性

外部被ばくは、体の外からガンマ線を浴びるが、内部被ばくは体内に入った放射性物質からガンマ線その他、ベータ線も受ける。ベータ線はエネルギーも小さく外部被ばくでは簡単な物で遮蔽できるが、体内では遮蔽する物がなく、直近より細胞、遺伝子を傷つける。傷ついた遺伝子は修復されるが、大き

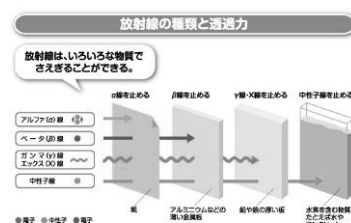
な被ばくを受けると修復ミス、突然変異を起こす。細胞分裂が盛んな子どもは影響が大きい。また、放射線が体内の細胞の水分子とぶつかり、フリーラジカル(活性化酸素)を発生させる。被ばくの影響としては大きいのは、このフリーラジカルが遺伝子をキズつけることだ。

政府基準 内部被ばく「年1ミリ」は安全ではない

ベクレルとシーベルトの違いは、ベクレルは放射能の物質的な強さ、1ベクレルは1秒間に放射線が1回飛び出すこと。キログラム3000ベクレルの牛肉は、1秒間に3000回の放射線が飛び出すこと。分かりやすい単位だ。シーベルトは人間が放射線を浴びて影響の大きさを示す単位だ。直接機械では計測できない、人間が換算したものだ。ここに内部被ばく計算の落とし穴がある。

政府の内部被ばくの基準は年1ミリシーベルトということだが、逆にシーベルトからベクレルに戻すと、76900ベクレルとなる。ベラルーシの元

ゴメリ医科大学長バンダジェフスキーが、汚染地域で亡くなった人1500人の臓器に溜まったセシウムの量と体への影響を分析した結果、体重1キログラムあたり50ベクレルで顕著な病理的变化があったことを証明している(事務局計算 - 体重50キログラムの人は50×50で体全体で2500ベクレルとなる)。年1ミリシーベルトの基準がいかに高く問題があるか。



子どもの臓器 50ベクレル/kgを超えると顕著な病理的变化
特に心筋です 20ベクレル/kgで代謝不明

バンダジェフスキー病理学的研究より

各臓器へのセシウム137の蓄積と細胞組織の変化(異常)

内部被ばくから健康を守るたたかいをつよめる

健康被害をさける食の目安として、河田さんは体重10キログラム以下の幼児も体重50キログラムの大人も、一日10ベクレルに摂取を抑えればバンダジェフスキーが明らかにした健康被害のレベルを避けられると提起しています。

私達は、政府や県の内部被ばくの基準の見直しを求めるとともに、身の回りにある食べ物の放射能の数値を確認し、また独自に計測してみるなど「1日10ベクレル以内の摂取」が守られているのか。県

や市が行なっているホールボディカウンターによる内部被ばく検査は、全市民の早急な計測ができるよう計測機器の増や、計測結果にもとづく健康管理のあり方など、県や市に求めていきます。また、内部被ばくを避ける食の摂り方の交流会を開催するなどの取り組みを広めて行きます。

原発のない福島を！3・23県民大集会 事故から2年怒りの県民7000人

今だ15万人避難生活！ 除染すれば森林ダメに！

放射能で汚染した東電は責任を取れ！

2011年3月11日、福島第一原発事故。あれから2年、あやまちを繰り返さないため福島市に集った。全電源喪失によるメルトダウンは、世界を震撼させ「世界のフクシマ」に。

2年経過後のいま、炉心冷却が29時間もストップ、県民は緊張と怒りに震えた。200万県民を被ばくの恐怖にさらした全電源喪失、東電はいまだに非常用のバックアップ体制がないことを知らされた。

「核と人類は共存できない」「人が処理できない原発は作るな」「県内10基すべて廃炉」「放射能まみれにした東電と国は責任取れ」五十嵐史郎実行委員長は力強く、7千人の参加者に、200万県民に訴えた。

実行委員会事務局：平和フォーラム内

**68万人予約が全てキャンセル！**

旅館組合 630軒、2年前の3・11 あってはならない日が来た。この世の終わりと思うほど、68万人の予約が消えた。組合員を守るため、211万県民被災者受け入れのため奔走。いち早く損害賠償交渉、キャンセルは100%原発の責任。

安全だといわれ鵜呑み、原発10基あることも知らなかった、恐ろしいことだ。もうこんなことはいやだ、福島県に原発はいらない。 -県旅館組合-

汚染された森林「除染」すれば保水力を失う！

福島県7割が森林、豊かな森。3・11原発事故で汚染、放射性物質が付着した腐葉土を除染すれば森林は保水力を失い、方向が見えなくなる。それでも頑張っていること、東電、国は知ってほしい。こんな中で大飯原発稼働させた、暮らしの豊かさ、みんなの幸せとは何なのか考えなければならぬ。

原子力を選ぶのか、選ばないのかがある。社会の仕組み、日米同盟の中、信念貫くのは難しいが、事故を経験して貫けると思った。 -森林組合-

2年たっても15万人避難忘れないで！

3月11日、地球が壊れると叫んだ。12日、防災無線で避難呼びかけ、津島地区、茨城県経由で群馬県の伊勢崎に12日間かけて避難。本当に涙を流した、早く地に足のついた生活に戻りたい。人は人の力で制御できないものつくるべきではない。2年たって15万人を越える避難者いることを忘れないで欲しい。 -県外避難者-

< 編集後記 > **郡山市の住宅除染「線量の高低でなく削った表土を自宅保管できる分だけ」？**

原発事故から2年経過、南地区では考える交流会が開かれた。話題は面的な住宅除染、昨年7月100戸のモデル除染として実施された池ノ台のKさんが経験を話してくれた。大事なことは「計測してホットスポットを見つけておくこと」、もう一つは「郡山市直轄室が表土除去量を3cmにするか、5cmにするかは自宅の保管場所による」としている。線量が高いから深くではなく、自宅保管できる量によって削る深さを決めていると話された。

参加された皆さんから、「それでは除染で線量下げるとはならない」「埋めたら土地売ることもできない」「やはり郡山市で仮置き場作らないと除染はすすまない」等と憤りの声が出されました。